

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA 天神南601号
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.149

2021年10月6日

〈URL〉 <http://www.peshawar-pms.com> 〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



〔写真〕 PMSガンベリ農場にレモンを買いつけに来た商人（2021年9月2日）

PMSは全ての事業を継続します——アフガニスタンの現状とPMSの今

村上 優

【中村哲医師の報告 ペシャワール会報バックナンバーより】

今を考える縁（よすが）として

村上 優

①時代に迎合せぬ不動の石でありたい（1993年7月）

中村 哲

②進まぬ復興、遠のくアフガン（2004年7月）

中村 哲

③「精神と道義の貧困」が蔓延する世界の中で（2013年10月）

中村 哲

進行する深刻な干ばつ

PMS支援室

PMSダラエヌル診療所の再開について

藤田千代子

【カラー特集】現地PMS活動再開!!／繰り返す干ばつ

【カラー特集】中村先生 雨ニモ負ケズ（中山博喜写真集『水を招く』より）

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、現在は中村医師が設立したPMS（平和医療団・日本）のアフガニスタンでの医療活動や灌漑水利事業等の総合的農村復興事業を支援しています。

ホームページはこちらから▶



命の尊さこそ普遍的な事実

「アフガンでは、飢餓地獄の巷に凍^{ちまた い}てつく冬将軍が迫っていた。緊急のアフガン問題は、政治や軍事問題ではない。パンと水の問題である。命の尊さこそ普遍的な事実である」

——中村 哲（『天、共に在り』より）

PMSは全ての事業を継続します ——アフガニスタンの現状とPMSの今

ベシャワール会会長／PMS総院長

村上

優^{まさる}

アフガニスタン情勢は二〇二一年八月十五日のカブールの無血開城以降、多くの報道や論評がなされています。PMSは情勢を見極め、職員の安全を確保するために一旦は事業を休止しました。治安と安全が確認できたところで八月二一日にドラエヌール診療所を再開、九月二日にはレモンの収穫を機にガンベリ農場の作業を一部再開しました。用水路事業は、九月四日にナンガラハル州灌漑局と協議、再開を待っているところです。

この間、PMSの活動地であるアフガン東部の農村地帯では大きな変化もなく治安上の懸念はありませんでした。ジャララバードではデモやISへの報復攻撃があったと報じられましたが、人々の生活上のトラブルは特段生じておらず、八月二一日にはバザールは従来の賑わいを回復し、閉鎖されていた銀行も九月四日には条件付き（二

〇〇ドル／人／週）で再開しました。首都カブールでも同様で、カブール空港周辺以外の治安上の懸念は表面化していません。

タリバン政府の陣容が暫定ながら公表され、地方でも州知事や郡長が決まりつつあります。中央官庁では灌漑用水路事業に係る農村復興開発省や水エネルギー省の体制には大きな変化がないようですが、NGOを所轄する経済省などの方針はまだ伝わってきません。

今後の焦点は、これまでアフガニスタンを支えてきた多くの分野の人材がどれほど留まっているのか、タリバンがこのような人材にどう対応するのか、国だけでなく州や郡にいたるまでの行政システムが機能するのか、ということです。

四〇年以上続く戦争が壊してきた人々の命と生活を、地域でつなぎとめてきたのが、PMSの活動でした。対立し、意見や立場



再開したダラエヌール診療所で外傷の手当てをしている様子。(2021年8月29日)

を異にする人々が一つの用水路を建設する。その姿が希望の灯となります。ペシャワール会はアフガニスタンの人々と共に、その灯を点し続けることを中村哲先生から託されました。私たちはその道を歩きます。

1. PMS現地事業の一時休止からの動き

八月十五日以降の動きは、PMS幹部より日本のPMS支援室に逐一報告があり、関連した海外ニュースを交えて情勢を把握しております。八月十五日より医療・農業・灌漑事業の休止を決定して、多くのPMS職員はそれぞれの自宅に家族と留まり注意深く推移を見ていました。

その後は現地スタッフ全員の安全が確認され、周辺での治安上の問題はありませんでした。カブールもジャララバードも静か



日常の光景が戻ったジャララバード市内。所狭しと店が並び、活気が伝わってくる。(2021年9月10日)

で、八月二日ごろにはバザールが日常化してきました。一般的な治安は保たれ、政変が起きる度に繰り返し見られた略奪や混乱はありませんでした。カブール空港は人が集まり混乱がみられましたが、出国を待つ人々だけでなく職を求める人々なども多く混じっているようでした。

2. 事業再開へ向けて

安全を確認し、まずは医療など一刻も待



てない事業から順次再開しました。

◎医療 一九九一年に開設したダラエヌール診療所は農村無医地区医療計画^{かなめ}の要でした。また水事業が始まった原点でもあります。以前より新型コロナウイルス、特にデルタ株の流行が広がり、呼吸困難を訴え酸素吸入を要する患者が急速に増えていました。診療にあたる医療職員の感染防御のために、七月にはN-95などの医療用の特殊マスクを急遽日本から送るなどの対応をしました。



記者会見でアフガニスタンの大干ばつを訴える中村先生とジア医師
(2018年11月16日)

夏はマラリアや腸チフスの流行期なので、住民からの診療所再開を求める声も多く、安全を確認して八月二日より再開しました。

◎農業 農作物や用水路周辺での植樹への水やりは地域の住民や作業員の手で継続されていきました。九月二日にはガンベリ農場のあるシェイワ郡長より「いつから再開するのか、治安は安定している」という連絡があり、事業を再開しました。

◎灌漑用水路 ナンガラハル州知事の就任を待って工事を再開する予定です。シギ・

ゴレークなどの新規工事は政府の基本的な体制(展望)を確認した上で始まります。干ばつの進行による食糧不足・飢饉の懸念から、灌漑用水路はアフガニスタンにとって緊急の課題です。地元住民の声が最も大切で、この声が政権に届くためには、ジルガやシュウラという長老会の自治組織が重要な役割を果たします。中村哲先生もその自治組織の意向を尊重して事業を根気強く継続してきました。

中村先生が残した詩を紹介します。

自然相手は、ただ根気

何があっても ただ水やり

寝められてもくさされても ただ水やり

誰が去っても倒れても ただ水やり

嬉しくても疲れていても ただ水やり

風が吹いても日照りでも ただ水やり

邪魔されても協力されても ただ水やり

誰が何と言おうと ただ水やり

魔法の薬はありません

3. 過去のタリバン政権時代から

一九九〇年代のタリバン政権下でも中村哲先生は事業を継続しており、農村部では治安が改善して事業を進める上では支障がないばかりか、安全であったと述べられています。

います。

一九八〇年代後半のソ連軍撤退後、軍閥による闘いの末、ラバニ政権が樹立されました。しかし、内戦はおさまらず、凄惨を極めるもので、当時のベシワール会報にも中村哲先生が報告をされています。それをイスラム法というアフガニスタンの伝統的な価値観でまとめて一九九六年に政権を取ったのがタリバンでした。今回はガニ大統領がタリバンの攻勢の前にカブールの無血開城を選択しました。多くの批判がありますが、「戦闘を回避した」決断は評価してよいと思います。

憎しみの連鎖が生まれて国が荒れ果てる、その戦争の歴史をアフガニスタンの人々は四〇年以上経験し続けてきました。中村哲先生は「タリバンを復古運動体と考えるなら、軍事力で潰せるものではない。誰が政権を担う場合でもアフガン人自身の政権であることが重要」と述べていました。アフガニスタンを舞台に大国や周辺国が代理戦争をしていることが不幸の始まり、と考えるアフガニスタンの人々も多くいます。

二〇年ぶりのタリバン政権ですが、中村哲先生がこれまでそうされていたように、「水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなろうと、他所



アフガニスタンが大干ばつの最中、PMSは2008年までに約1600本の飲料用井戸を掘削した。(2002年8月11日)



PMSが掘削した井戸で水汲みをする子供たち。遠い水汲み場へ毎日出向く女性たちは重労働から解放された。(2001年4月26日)

アフガニスタンの人口と干ばつの被害

	2000年	2018年	2021年
人口	2,400	3,700	4,000
飢餓線上	400	830	2,000
餓死線上	100	330	1,400

単位：万人（国際機関による概数）

中村先生は二〇〇〇年の大干ばつを機に

4. 戦より食糧を

に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います」の言葉を胸に現地事業を続けてまいります。

水事業を始めました。その後も干ばつは進行し、二〇二一年は近年最悪の被害をもたらした二〇一八年を上回る被害が予測され、国際機関などが支援を呼びかけています（表参照）。

今年、PMSが行っているクナル河での水位測定は二〇一八年と同様の低い水位のパターンで経過しています。前政権も農地復旧に力を入れ、灌漑事業をPMS方式で進める計画を立てました。これらの政策が踏襲されるか否かはタリバン政権の判断を待たねばなりません、多くの民衆がま

ず第一に「家族一緒に三度の食事をとる」ことを求めているのですから、おのずと選択は決まるでしょう。また新型コロナウイルス株が猛威を振るう中で栄養が足りず免疫力が弱いものから倒れていく事実を思う時に、いまアフガニスタンに必要なことは命をつなぐ行動であることは明白です。PMSの事業に猶予はありません。

日本でも多くの地域で新型コロナウイルス株による感染が拡がる中、PMS/ベシヤワール会をここに留め、支援していただいていることに感謝申し上げます。

（九月十七日記）

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ベシヤワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついてきます）。ご希望の方は事務局にご連絡下さい。パンフレットはA3変形を四折したもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。（ポスティング等は御遠慮下さい）

◎中村哲医師の報告 ペシャワール会報バックナンバーより

今を^{さすが}考える縁として

ペシャワール会会長／PMS総院長

村上 優

二〇二一年九月、タリバンが政権を樹立した。中村哲先生は、この現状をどのように思われるだろうか。その糸口を求め、一九九〇年代からのペシャワール会報に掲載された中村先生の報告から読み解いてみよう。

一九八四年に中村先生の現地活動は始まった。ペシャワール・ミツシオン病院でハンセン病医療の整備（専用病棟、合併症手術サンダルワークショップ）を行い、パキスタンの旧北西辺境州と東部アフガニスタンでの「ハンセン病センター」としての機能が定着した。ついでハンセン病多発地帯への診療体制を作っていく。対象は山岳地域にある貧しい村々で、全くの医療過疎地であった。

一九七九年にソ連が当時のアフガンの社会主義政権を支援する目的で侵攻し、それに抗するイスラム教勢力や軍閥など地域勢力との間で激しい戦争が起こっていた。一九八九年にソ連は撤退を余儀なくされ、一

九九二年にはソ連が支援していたナジブラ旧政権も倒れたが、その後も各派軍民が権力闘争をおこして大規模な衝突が繰り返されていた。アフガニスタン全土を内戦が覆う状態で、目まぐるしく敵味方が交錯していた。一九九四年には権力を握るマスード派のラバニ政権が攻撃され、カブールはほぼ壊滅した。

中村先生はその頃、一九八〇年にソ連・アフガン政府軍によって虐殺されたケララ村の二五〇〇人が眠る墓地を訪れていた。そして会報四一号（一九九四年十月二六日発行）に「ケララ村の惨劇——生きる者^{きもの}驕るなかれ」の一文を寄稿している。

内戦の「血で血を洗う抗争」を、「農村地帯の出来事は生易しいものではなかった。人間がいかに残酷たり得るかという実験場の観を呈した。そこには確固たる『死の力』が支配していた。彼らは——殺された者も殺した者も——地獄を見た」と記し、具体的な惨劇にも少し触れている。そして「死の力に翻弄^{ひんぎ}される人間の現実。それを網膜の奥にやきつけた者は、農村の情勢が安定したとき、敵も味方も沈黙していた」と述べているが、中村先生も網膜の奥にそれをやきつけた、そのひとりだった。

「ケララ村の墓標は、さりげないたたずまい

である。だが、（中略）そこには死者の沈黙が冷然と生者の営みを眺め、両者を隔てる壁が厳として存在する。人々は、その重さのゆえに口を閉ざして語らない。しかし、『アフガニスタン』に関わった全ての者——武器を与えて戦争をおこった者はもちろん、自覚なきアフガン人たち、人道的支援で喝采を受けた外国人、アフガニスタンを語ったジャーナリスト・評論家——死者を踏み台にして生きた者は、等しく、この『死者』のまなざしに戦慄すべきである。（中略）私もまた、死者のまなざしに脅える者の一人である」

実は、その八年前の一九八六年に中村先生は、生き残ったケララ村民のキャンプで診療を行っていた。「当時、これら難民たちの、一種異様な、敵意と暗さを感じたのは、理由のないことではなかった訳である」と、当時の体験を想起している。そして、「目前で展開されたこれらの事実を、軽々と器用に総括することができなかった。しかし今、生者の破局的な営み、死の力の跳梁^{ちやうりやう}を全世界に見るとき、犠牲者になり代わって、『自覚なき生者の驕り』を伝えずにはおれない。同時に内戦で逝った二〇〇万の魂を鎮める祈りは、人が根底で共有できる希望を分かち合うことで、真実となると信じるからである」と記した。

中村医師の非戦の核心はここにあったと言ってもいいだろう。分かち合う希望が、その後の事業Ⅱ山村無医地区医療・農業・灌

灌溉水路を黙々と進める力になっていく。

◇

タリバン（元は神学生の意）は一九九四年に登場し、一九九五年以降はアフガニスタンの三分の二を支配し、翌年のカブール陥落後は多くの地域を支配することになる。厳しいイスラム法の統治下で治安は安定していたが、都市知識層・中間層はカブールを脱出する。このために再建は遅れ、都市部を中心とする貧困層は劣悪な環境に置かれていると中村先生は報告している。

一方、農村部はむしろ安定しており、PMSは医療事業を進め、四つの診療所を設立した。一九九八年にはPMS基地病院をペシャワールに建設することができた。

二〇〇〇年の大干ばつからは井戸掘りの水事業がダラエヌールをはじめナンガラハル州内で始まるが、この事業展開にタリバンは協力し好意的であった。多くの外国NGOが撤退していく中、二〇〇一年にはカブールの最も貧しい地区に緊急診療所五カ所を開設するなど、誰も行かない、誰もしないが故にあえて手を差し伸べる活動に邁進する。二〇〇一年の9・11同時多発テロを受けて米軍が侵攻してから二〇〇年、再びタリバンが戻ってきた。この二〇〇年に何が起きたか。いや、二〇年どころか、ソ連の侵攻から四〇年以上、アフガニスタンを舞台にした戦争が続いたのだった。さらに、地球温暖化の結果としてこの地の干ばつは現在に

至るまで、波がありながらも続いている。

大干ばつに対するPMS方式の灌漑事業は技術的な方法論が確立している。『アフガン・緑の大地計画』が完成し、二〇一八年からは、ガニ政権のもと、アフガニスタン各地にPMS方式を広げることが決定され、ガイドライン作成につながった。政権が代わっても、人々の命をつなぐ活動は「非戦のもとに共に希望を分かち合う事業」として継続すべきである。

カブール無血開城を、中村先生は安堵さ

中村哲医師の報告から①

時代に迎合せぬ不動の石でありたい

*ペシャワール会報三六号（一九九三年七月三〇日発行）より

二人三脚

福岡市の一角で、毎週水曜日の夕べともなれば小さな集まりが行われる。集まりと言っても、至って簡素かつ楽しい雰囲気です。二〇名前後の有志会員の手で事務作業が進む。初めて訪れる者は、まさかここが、パキスタン北西辺境州のペシャワールに本拠を置くJAMS（日本・アフガン医療サービス）を支える目立たぬ根拠地だとは、想像できないだろう。

れているのではなからうか。酷い戦闘が起らなかったのだから。まずは命を確保すること、全てはそこから始まる。中村先生が活動を始めて一〇年、二〇年、三〇年の節目にペシャワール会報で語ったメッセージを再掲載して、今を考える縁としていただきたい。『うわべの時流に木の葉のごとく漂うのも石のごとく沈むのも自由なら、我々はあえて時代に迎合せぬ不動の石でありたい』という言葉を、今だからこそ、かみしめたいと思う。

ペシャワール会（問田直幹会長）は一九八三年九月に結成された。以来一〇年、会は黙々と現地事業に専念、現在では二五〇〇名の会員がいて、年間六千万円に及ぶ現地活動費の募金、情宣活動、必要物資の調達・輸送、日本からの人材派遣が行われている。我々には大仰な「国際協力の哲学」もないが、七面倒な議論ぬきに、実質的な現地協力で心を合わせ、立場を超え、思想信条を超えて、官民を問わず、無数の良心的協力で運営されている。まさに、現地・日本の

良心を合わせる二人三脚である。

さりげない外観にもかかわらず、会の構想と活動規模は雄大である。ベシヤワール・アフガニスタン現地の事業そのものが、ゼロから始まった一〇年の努力の着実な成果を雄弁に物語っている。プロジェクトは二つある。一つはパキスタン北西辺境州のらい根絶計画の支援で州唯一のらい治療センターを支え、もう一つは内戦後のアフガニスタン復興支援で、その北東山岳地帯の広大な無医地区に「農村医療計画」を初志一貫して継続している。直接会が支える現地スタッフは九五名、過去日本から赴いたボランティアは三〇名以上、アフガニスタン関係の四つの診療所だけでも年間一〇万人以上を診療し、さらに拡大しつつある。住民の厚い信頼を得て、両者とも今や現地に不可欠の存在となった。

最後の米ソ激突

奇しくもこの一〇年は、世界史的な激動期に対応する。「アフガニスタン」はまさにその象徴的な集約点とも言えた。この間冷戦構造下最後の米ソの激突たるアフガン戦争、ソビエト連邦の解体、湾岸戦争などのイスラム世界の台頭の余波を現地は直接被った。伝えられざる現地事情の中で悪戦苦闘しながら、我々自身がいかにけず認識を新たにすることが多い。「協力」に意気込んで始めたところが、現地の現実には直接

して気づかなかったことに気づき、忘れたことを思い出し、我々の方が豊かになったとも言える。

日本ではもうあまり記憶されていないが、かつてソ連軍侵攻とモスクワ・オリンピックのボイコット、二〇〇万人の死者と六〇〇万人の難民を出したアフガン戦争を想起する者も居よう。一九八八年のソ連軍撤退・難民帰還協力、一九九二年のカブールの権力闘争と、断片的に情報が伝えられたまま、三度「アフガニスタン」は世界の関心から遠ざかった。

だが、「国連を通しての国際貢献」が明らかな形で打ち出され、ひいては湾岸戦争の協力からカンボジアPKOへと日本を導き、戦後国論を二分した憲法論議に新たな局面をもたらししたのも「アフガニスタン」だったことを知る者は少ない。

国際化時代が叫ばれながらも、アジア世界に関する限り、案外我々の「国際的認識」はあやふやなものであることが分かる。移ろいやすい関心と歩調を合わせて、現地の実情は似ても似つかぬ虚像を日本で残したまま忘れ去られようとしている。あれほど沸いた「アフガニスタン復興支援・難民帰還援助」の大規模な国際支援は実効を見ぬまま放棄され、かつて三〇〇を超えた国際「援助」団体は騒ぎを残して現地を去り、パキスタン三〇〇万人の難民は独力で帰還して、独力で復興に動んでいる。「混乱を極

める」はずの政情をよそに平和な光景が農村部には広がり、新世界秩序の担い手たる国連は人々から嘲笑されている。BBCの報道で仕立てられた「指導者」たちは力がなく、テロのイメージを伴ってセンセーショナルに喧伝された「イスラム」も、実は人々の間では寛容な多様性を以て健在である。欧米勢力の介入によって混乱は混乱を加え、平和は住民自らの手で防衛された。

二〇〇万人の死者の意味

アフガン戦争の、あの二〇〇万人の犠牲の意味はいったい何であつたのか。復興援助という名の巨万の浪費は何であつたのか。軍事援助と復興支援が同時に強行されるという国連の失態は反省されたのか。国際秩序は誰のために存在したのか。それに踊らされた上、現地住民の間で評判を落とした日本の無念は自覚されたのか。いや、これら事実を知らされさえしたのか。そして、このあやふやな認識の上に「国際貢献」が論じられ、いやくも国民の基本指針たる憲法に影響を与えるとすれば、そら恐ろしい事だと言わねばならない。

これらを語ることは、私には気が重い。日本で「国際〇〇」の議論や催しものを聞くごとに寂しい思いをする。「復興支援」が切実に求められている今、我々は活動に忙殺されて議論に加わる暇もない。しかし、「知られざるアフガニスタンの民の現実」を回

【報告】現地 PMS 活動再開!!



PMSガンベリ農場で、レモンを収穫し、出荷用に袋詰め・計量をしている様子。これらのレモンは日本でいうスダチやカボスと同じ使い方、現地では毎食出してくる生の玉ねぎやキュウリ、トマトにしぼって食べると美味である。(2021年9月2日)



ガンベリ農場の草取りに勤しむ作業員たち。活動休止中に、雑草が生い茂っていた。(2021年9月2日)



牛舎。人の世界の情勢など知る由もなく、平和な顔でこちらを見ている。(2021年9月2日)



マルワリードII用水路。柳への水やり風景。(2021年9月6日)



黒砂糖の露店が連なっているジャララバードのバザール。タリバンがこの地を制圧して、一時は全店が閉まった。混乱や略奪もなく、気づけば一週間後にバザールは正常に戻っていた。(2021年9月10日)



カブールのバザールのジュース屋。こちらも現在目立った混乱は見られず、露店が並び賑わっている。黒砂糖の原料であるサトウキビだが、現地では屋台で搾りたてのジュースとしても売られ、とてもポピュラーな飲み物だ。(2021年9月10日)



PMS ダラエヌール診療所の薬局。再開を待ちわびていた地域の人々が押し寄せ、スタッフは大忙しであった。(2021年8月26日)



右上：再開と同時に満席になった女性待合室。待合室はコロナやその他感染症の衛生指導を行う場所ともなっている。ダラエヌール診療所は1991年に中村医師が初めてアフガニスタンに開設した診療所で、ブルカを着た女性たちが子どもを連れて待っている様子は当時から変わらない。

(2021年8月29日)

左上：診療中のハフィズラー医師 (2021年8月26日)

左下：外傷（農作業中のケガなど）の患者を治療するPMS医療スタッフ。(2021年8月26日)



繰り返す干ばつ

今年は過去経験した2000年、2018年の干ばつを上回る大干ばつがアフガニスタンを襲っており、深刻な事態となっています。中村医師が水事業を始めてからの20年間で、過去の状況（5ページ参照）と照らし合わせながらご覧ください。

2000年 干ばつの顕在化



2000年の大干ばつで渴ききったダラエヌール診療所近くの畑。農業ができなくなり、村人は難民となって、村を離れざるを得なかった。（2000年）



ダラエヌール渓谷の乾いた川。もとは周りに豊かな畑が広がっていた。（2001年1月14日）



地下水位が下がり、涸れたカレーズ（地下水路）。PMSは38カ所復旧させた。（2001年7月30日）

2004年



PMSが水事業を開始し、農業が復活したダラエヌール渓谷。PMSは2001年から2008年まで同地に13基の農地用の大井戸を掘削した。（2004年6月27日）

その後も干ばつはおさまることなく…



そして、現在

2000年、2018年を上回る干ばつがアフガンを襲っている！



ダラエヌール渓谷ブディアライ村の現在。小麦の収穫後、深刻な干ばつの影響で何も耕作できていない。本来であれば米や豆、トウモロコシが育っている時期である。（2021年9月8日）

干ばつに抗する



↑マルワリード用水路Q3貯水池。貯水池は山岳部から流下してきた洪水や雨水を貯え地下水位を上昇させ、植物の生育にも寄与する。今後PMSは谷部に干ばつ対策として貯水池を増やしていく予定である。(2017年8月13日)

→バルカシコート周辺では谷からクナール河へ鉄砲水が流れ下る。PMSでは現在、試験的に石積みの砂防ダムを設置中。

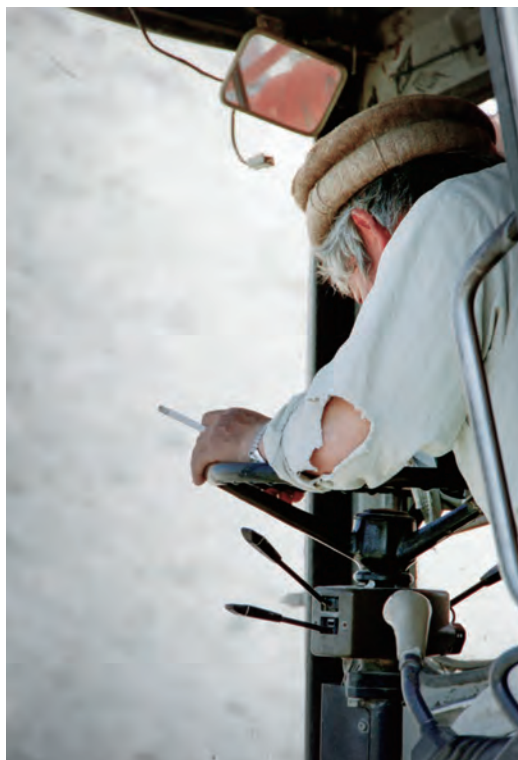


谷に建設中の砂防ダム。植生工と組み合わせ、数力所設置し、段階的に洪水流の勢いを緩和する。一気に流れ下るのではなく緩流化させることで、防災の役目を果たすと共に、地下水位の上昇が期待できる。(2021年7月24日)

中村先生 雨ニモ負ケズ

～中山博喜写真集『水を招く』より～

現地で5年間働かれた中山博喜さんの写真集『水を招く』から貴重な写真をいくつか紹介します。中村先生と一緒に仕事をしていた地元の人々の自然な姿をご覧ください。



「ここに生きるという切実な祈願を支えに、土埃に塗れて大地を穿ち、切り拓いたまっさらな路^{みち}に、水を招く」
(『水を招く』より)

顧するとき、二〇〇万人の死者が叫ばずば、私が沈黙を通す気にはなれない。

「JAPAN」

日章旗を描いたJAMSの車両が、医療品を満載して東部アフガニスタンの山岳地帯を駆け巡り、現地住民は親しみを込めて「JAPAN」を想起する。皮肉なことである。我々は何も日本の宣伝を企図した訳ではないが、撤退する欧米諸団体を尻目に現地でのJAMSと日本の評価は高まり、逆に日本では「アフガニスタン」が忘れ去られる。「ベシヤワール会」という取るに足らぬ地方の小さなグループが、薄れた関心の中で青息吐息で補給を支えているなど、現地では誰も想像しないだろう。

規模の大きさが必ずしも良いとは限らないが、我々の活動は国際的に決して恥ずかしいものではないのである。現地の実情に通じ良心的協力を果たせる点において、他を圧するものがあると言っても誇張ではない。だが、これを築くためには多くの試行錯誤と殉職者まで出し、幾度かの財政危機もくぐり抜けてきた。ワーカーを通して異文化の壁を超えるまでには、日本・現地双方に痛みも強いた。

◇

ベシヤワール会一〇年の軌跡は、自分も予想しなかった地点に我々を立たせ、赤裸々な現実の中で我々自身を問うてきた。

「二隅を照らす」とは私の好む言葉である。我々は現地との深い関わりを縁として日本の良心を束ね、何十年かかって事業を完遂し、共に歩んで労苦と豊かさを分かち合い、以て人間と自らを静かに問い続けるよ

中村哲医師の報告から②

進めぬ復興、遠のくアフガン

——帰還難民増加に備え、用水路は最難関の工事を開始

*ベシヤワール会報八〇号(二〇〇四年七月七日発行より)

二〇〇三年度を振り返って

ベシヤワール会が結成されたのが一九八三年九月、小生がベシヤワールに着任したのが八四年五月、ちょうど二〇年が過ぎた。しかし、会が事実上ひとり立ちして歩み始めたのは、PMS(当時はベシヤワール会医療サービス)の母体になる団体が八八年に出来てからであるから、満十五歳というのが正しかろう。「思えば遠くへきたもんだ」というのが実感で、思いは語りつくせない。自分が生きて、こうして報告書を書いていくことさえ、不思議である。

世の中には分からないことが多い。特に二〇〇〇年からの大旱魃(かんばつ)に次いで、二〇〇一年の「9・11」とアフガン空爆の大騒ぎから、私たちが何気なく信じている多くの

すがともしたい。内外共に戦後最大の転機に直面する現在、うわべの時流に木の葉のごとく漂うのも石のごとく沈むのも自由なら、我々はあえて時代に迎合せぬ不動の石でありたい。

ことが、案外錯覚や誤った認識に基づいていて、どうもインチキくさい世界に生きていることが肌身にしみて解ってきた。「9・11以後」という言葉をよく耳にする。確かに表層の現象を追えば、何かが突然変化したように思える。だが現地から見える光景は少し違う。世界と人間は何も変わっていない。人間の分限を超えた思いがりと欲望とが、亡霊となって膨らみ、私たちにとり憑いているのだ。恐ろしいのは、「文明の正義」と称し、自省なくそれに踊らされ、簡単に殺し、嫉み、憎み、党派心を起し、傷つけあうことである。私たちの文明は人類の発生から続く野蛮の上に張る薄い氷の膜に過ぎない。ここ数年の凶暴な国際社会の動きは、それを実証した。今や「民主主義」ですら、戦争の正当化に使われるとい

う、面妖な世の中になってしまった。

それでも、変わらぬ人の良心に私たちは耳を傾ける。それは「国際〇〇」でくぐられる疑似的な普遍性ではない。いつの時代でも、どんな場所でも人を慰め、人を戒める事実である。我々は限られた時間で、限られた空間の中で生きてゆかざるを得ない。現地活動もそうで、「国際協力」でなく「地域協力」である。縁あって長くなり、大きくなつたに過ぎない。時流に乗せられて、何かの享楽の手段や、一見権威ある声に惑わされてはならない。脚下照顧という。我々に欠けているのは「進歩」ではなく、人としての自省である。これがある限り、世界的な破局は恐れるに足りない。敵は我々の中にある。これが二〇年のささやかな結論である。

二〇〇三年度の概況

二〇〇三年度はベシヤワール会が始まって二一年目である。二〇〇一年一〇月の米軍によるアフガン空爆、「対テロ戦争」という名の新たな軍事戦略は、「9・11以後」として世界中を揺さぶった。破壊と復興支援が対となり、その論理は「民主化」、「テロ防止策」として、先進諸国に説得力を持ち、イラク・パレスチナを始め、イスラム世界で猛威を振るった。事情を知る者が強く警告したように、対テロ戦争、武力による「民主化」は、テロリスト予備軍を大量生産した。復興支援で潤う一握りの都市中

産階級をのぞけば、少なくとも東部アフガンで米軍と外国勢力の存在を快く思う者はほとんど居ない。

イラク占領の「手本」とされたアフガン問題は世界の関心から遠ざかった。明るい「復興」の報道の後、あたかも民主国家成立が着々と進んでいるかのような印象を残し、アフガニスタンは再び忘れ去られた。しかし、米軍や同盟軍への攻撃は後を絶たず、パキスタン北西辺境州自治区にアルカイダとタリバーン勢力が潜伏すると見た米軍は、〇三年秋から大規模な作戦を展開した。だが、自治区住民は頑強に抵抗し、東部アフガン(クナール州、ニンガラハル州、ローガル州、カンドハール州)の国境地帯は混乱している。

さらに、イラク侵攻・統治に忙殺される米軍は、功を焦って民政に関わり始め、一方で軍事的関与をNATO諸国に求めつつ、他方国連と協力して八〇億ドルの巨費を投じて「〇四年九月の総選挙実施」を演出しようとしている。地元民は「イギリスの悪知恵、アメリカの軍事力、日本のカネの三位一体だ」と陰で揶揄している。対日感情は今後、いっそう悪化するだろう。〇四年五月、現地のニュースで「日本軍(陸上自衛隊)をアフガン派遣」と報ぜられるや、一般民衆の間で不信感が一挙に広がった。PMS(ベシヤワール会医療サービス)では、自衛のため泣く泣く日章旗を塗りつぶし、緑の旗に変えた。これは日本人として屈辱的であっ

た。〇三年十一月、PMS水路工事現場で米軍ヘリが我々を襲撃したが、これはごく一例に過ぎない。現地では度重なる誤爆の犠牲者に加え、捕虜虐待、枯葉剤の散布などで外国人への敵意が潜行拡大している。

事態は選挙どころでないのが実態で、パキスタンだけで一六〇万人と言われる難民の困窮はほとんど改善されなかった。大半が飢餓に直面し、故郷から避難先へ舞い戻ったのである。世界に散発的に伝えられたのは、首都カーブルを初めとする大都市の現象と政治的動向だけであった。しかも支援の七割以上が国連・外国NGOを通して与えられたので、いくら米軍に擁立された政権とはいえ、アフガン政府は官吏の薄給さえ支払えず、カルザイ政権自ら援助機関を経由しない「直接の援助」を訴える有様であった。麻薬撲滅も、国軍創設も、武器回収計画も、思うように進んでいないのが現実である。

二〇〇〇年に本格化した大旱魃は四年目を迎えたが、いよいよ深刻化している。〇三年四月、WFP(世界食糧計画)は「三年ぶりの大豊作」を予告したが、わずかに雨が増えたのみで雨水に頼る小麦作はことごとく壊滅、予言は当たらなかつた。逆に〇三年十二月から期待された高山の降雪量は異常に少なく、〇四年度の早魃と沙漠化はさらに進行するものと思われる。事実、PMSが完成した井戸は次々と涸れ始め、地

中村哲医師の著作等

(価格は税込)

アフガン・緑の大地計画

Peace (Japan) Medical Services & ベシヤワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円

2021年10月末発売予定!

中村医師がNHK「ラジオ深夜便」で語った
貴重な証言録が待望の書籍化!

わたしは「セロ弾きのゴーシュ」

中村哲が本当に伝えたかったこと 1760円

天、共に在り

アフガニスタン三十年の闘い 1760円

NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
☎ 03 (3464) 7311

希望の一滴

中村哲、アフガン最期の言葉

A5判192頁オールカラー 1650円

西日本新聞社 福岡市中央区天神1-4-1
☎ 092 (711) 5523

アフガニスタンで考える

～国際貢献と憲法九条～ 726円

文庫化しました!

人は愛するに足り、真心は
信ずるに足るアフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 1078円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
☎ 03 (5210) 4000

医者、用水路を拓く 1980円

ベシヤワールにて 1980円

ダラエ・ヌールへの道 2200円

医は国境を越えて 2200円

医者 井戸を掘る 1980円

辺境で診る 辺境から見る 1980円

福岡市中央区渡辺通2-3-24
石風社 ☎ 092 (714) 4838

医者よ、信念はいらないまず命を救え!

1980円 羊土社

千代田区神田小川町2-5-1 ☎ 03 (5282) 1211

アフガニスタンの診療所から

814円 ちくま文庫

東京都台東区蔵前2-5-3 ☎ 03 (5687) 2680

映像記録DVD

荒野に希望の灯をともし

～医師・中村哲の35年の軌跡～

[2021年発売] 2970円

アフガニスタン [16年発売] 2970円

用水路が運ぶ恵みと平和

アフガニスタン [12年発売] 2750円

干ばつの大地に用水路を拓く

[企画]ベシヤワール会[製作]日本電波ニュース社

下水位の異常な低下が至る所で観察されている。国民の八割以上を占める農民たちの実情を考えると、「アフガン国家の破綻」は決して戦争や政治問題でなく、異常気象Ⅱ沙漠化によってもたらされることは確実だと思われる。

しかも、この旱魃が突然現れたのではなく、十年以上をかけて徐々に悪化の一途をたどっていることを考えると、為政者も外国援助団体も、その深刻さに戦慄すべきであらう。国家を底辺から支えてきた農村の分解が促進され、飢えた流民が大都市にあふれる。彼らは決して明るい「アフガン復興」の話題に上らない。そして、アフガン社会のモラルを強固に支えてきた不文律、農村の掟が弛緩し、外国製の「民主化」が強要行される。混乱は必至だと考えざるを得ない。彼らの生活安定以外に、治安の改善も、国家再建の道もないというのが我々の見方である。

中村哲医師の報告から③

「精神と道義の貧困」が蔓延する世界の中で

——福岡アジア文化賞(大賞)授賞式でのスピーチ

*ベシヤワール会報二七号(二〇一三年一〇月九日発行)より

中村哲医師は、二〇一三年九月、福岡アジア文化賞大賞(福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団主催)を受賞した。

*

「福岡アジア文化賞」を授与される荣誉に、感謝と喜びを申し述べます。

私がこのような賞に相応しいか、正直なところ自信がありません。私の世界は、九州とアフガン東部だけです。いわゆる「国際人」ではありません。

しかし、三〇年間の現地活動を通して、アジア世界全体に共通する苦悩を多少分かち合えるかも知れません。

アフガニスタンは過去三五年間に及ぶ戦乱、外国の干渉に悩まされると共に、大規模に進行する干ばつと洪水で、人々は生存する空間を失いつつあります。現地の気候変化Ⅱ温暖化による影響は生やさしいものではありません。かつて完全に近い食糧自給を誇っていた農業立国は、自給率が半減し、瀕死の状態です。国民の殆どが現金収入のない農民であることを思えば、これは恐るべき事態です。

報道で伝わる「アフガン問題」は、政治や戦争でなければ、アフガン伝統社会の暗黒面ばかりで、自然の猛威が大きく取り上げ

られることは、あまりなかったと思います。こう述べる私たちも、初めは気づきませんでした。私たちPMS（平和医療団・日本）は名前の通り医療団体ですが、二〇〇〇年に大干ばつが顕在化したとき、清潔な飲料水と十分な食糧があれば多くの患者が死なずに済んだという苦い体験がありました。

国際支援の中で、水欠乏＝干ばつによる食糧不足はあまり重視されなかったため、自ら飲料水源、大小の水利設備の充実、とりわけ取水設備に力を入れてきました。多くの地域で地下水の枯渇と共に、大河川からの取水困難が起きているからです。

現在私たちは、アフガン東部の穀倉地帯の一角で、一万六五〇〇ヘクタールで暮らす六五万人の農民たちの生存空間を確保し、ひとつの「復興モデル」を完成しようとしています。戦は解決になりません。軍事干渉は、事態をいっそう悪くしてきました。

翻って見ると、これはアフガニスタンだけの問題ではないようです。世界を席卷する国際社会の暴力化、多様性を許さぬ画一化の中で、アジア世界全体が貧困にあえいでいます。その日の糧に窮するだけでなく、固有の伝統文化を失い、故郷を失い、人間の誇りを失い、和を失い、経済発展のためなら手段を選ばぬ「精神と道義の貧困」が蔓延しています。加えて、自然を思いのまま操作できるような錯覚は、世界に致命的な荒廃をもたらそうとしています。気候変動＝

自然に対する関心のなき自身が、現代の病理を現しているような気がしてなりません。他人事ではありません。やがて、自然から遊離するバベルの塔は倒れるでしょう。人も自然の一部です。科学技術や医学、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人が和する道を探る以外、生き延びる道はない

進行する深刻な干ばつ

PMS支援室

現地の政変のため、PMS職員からの報告に代えて、七月の支援室作成の月報から掲載いたします。

＊

現地では、七月二〇日からイスラム教の犠牲祭（大イード）が始まり、PMSも一時の休暇となりました。コロナウイルスや治安悪化の心配がありましたが、今年は親戚同士でのお祝いの挨拶が行われたようです。例年同様に日本からナカムラコミッティーメンバーたちにお祝いを伝えました。

厳しい干ばつ

今年は二〇一八年並みの干ばつになると

でしょう。でも今回、過去の受賞者の方々が温めてきた主張を見ると、驚くほど共感できるものが多く、自分が決して孤立してはいないことを知りました。これは大きな励みです。この声が今は小さくとも、やがて大きな潮流となることを祈り、感謝の言葉といたします。

アフガニスタンでは言われており、六月にはガニ大統領も、アフガニスタン全域で食糧不足が発生していると発表しました。

PMSの活動地では、マルワリード用水路が横断するドラエヌール渓谷の水不足が心配されていました。この谷はPMSの井戸事業で農地灌漑用の大きな井戸を二三基掘削した所で、更に上流に行くとドラエヌール診療所があります。降雨も少なくこれらの井戸の水位が低下したため、農地の水不足が深刻になっている村々から「マルワリード用水路から水を汲み上げて農地へ水を引きたい」との要望が伝えられました。中村先生が以前に計画されていたこともあり、P

2022年カレンダー

「人命水」

制作 ペシャワール会/PMS

B3判カラー

写真 13 点+中村哲医師の言葉

予価1500円(税+送料込)



今年もPMSカレンダーを制作します。アフガニスタンの人々の生活に焦点を当てた写真に、中村医師の珠玉の言葉を添えています。ぜひお買い求め下さい（ご友人・知人へのプレゼント発送も承ります）。

※ご予約は同封の申し込み用紙で。代金は後払い。払込用紙を同封します。

※ご好評につき、サイズが大きくなりました。



ダラエヌール渓谷で灌漑用井戸を掘削している様子。奥に見えるのは干ばつにより渴ききった畑。（2003年8月27日）

MSは、①灌漑井戸の水位が上がってきた時点で汲み上げを停止する、②決められた給水量を越えない、③農業以外の用途に転用しない等の条件で承諾しました。

二〇〇九年にマルワリード用水路が最終地に到達した時、「このまま干ばつが進行すると、いつかこの谷は干上がっていくだろう」との中村先生の判断で、試験農場をこの谷からガンベリに移転したことを思い出します。

七月に、NWARA（アフガニスタン国家水資源管理機構）から技術者五名が一週間の研修にきました。また、カブル河流域河川管理官が訪問・視察、MRRD（農村復興開発省）が行なっている事業現場でアドバイスを求められたりと、PMS職員は忙しくしていましたが、進行する深刻な干ばつ対策に政府も力を入れているようです。



築堤工事。水を撒き、ローラーで締め固めを行う。（2021年6月29日）

◆灌漑事業

1. バルカシコート堰

現在クナール河の水位が高いので、主な作業は築堤・護岸工事と植樹や水やりです。

七月末から八月にかけてクナール河上流のヌーリスターン州で局所的な豪雨があり、河の水位が急激に高くなりました。昨年の同時期に同様の豪雨でマルワリード用水路が通過するウォレス谷から激しい土石流が下り、多大な被害ができました。世界各地で同じような気候現象がみられることを考えると、温暖化の脅威をひしひしと感じます。

以下、現地活動の詳細をお伝え致します。



バルカシコートの砂州1で水やりをしている作業員たち。水やりは根気あるのみ。(2021年6月20日)

堰が接続している砂州1や取水門上流側の岸辺の植樹については活着率が高く、植樹班によって良くケアされています。

2. マルワリード堰や取水門の改修工事

七月現在、治安が悪化しているため延期。なお、PMSが手がけた堰の観察については、各取水門の門番やエンジンニアによる定期的な見回りを継続しています。

3. シギ・ゴレック堰計画

対岸に位置するシギ堰とゴレック堰建設時の護岸線について両岸の地域住民の協議がもたれ、妥協策を見出していく過程にあります。

◆農業——PMSガンベリ農場

・一月から開墾を始めて農地が広がりを見せる中で、問題であった人手不足と農産物生産の向上を図るため、職員の補充が行なわれました。農業高校を卒業した二四名の候補者の中から五名が試験採用され、七月二四日から農場で働き始めました。今年には他の地域では干ばつが厳しいため、PMS農場ではそれに備えた食糧生産と貯蔵庫等の設備を整える予定です。二〇一五年に移植したナツメヤシに初めて実がつけました。アフガニスタン、パキスタンでは大変好まれていた食物で、中村先生も結果を楽しみにしていました。PMSでは初めての栽培なので無事に収穫まで漕ぎつけられるかを観察中です。

・稲や柑橘類ではPMSが今まで体験したことのない栽培上の問題が出てきました。担当のアジマルジャンと支援室の担当者が密に連絡を取り、専門家の細野博士や福岡の農業試験場からアドバイスを受け対応中です。

◆医療——ダラエヌール診療所

六月の診療数は五五四人と前月から一五〇〇人も増加しました。原因はコロナウイルス感染が疑われる患者の増加にありました。そのような患者はジャララバード市内の治療センターに送ることになっていま



結果したナツメヤシ。ナツメヤシは現地で好んでよく食される、ビタミンとミネラルたっぷりのスーパーフードである。(2021年6月29日)

◆その他

『PMS方式灌漑事業ガイドライン』の日本語版と英語版が完成。現在パシトゥ語版とダリ語版を制作中です。

すが、呼吸困難の症状が多く診療所の酸素ボンベが不足に陥り急遽購入を進めました。ハフィーズ医師は、デルタ株が蔓延してきたと考えられると報告しています。バザールでは医療用のマスクの入手が難しくなっており、FAO（国連食糧農業機関）の協力を得て急遽現地へ発送しました。

PMSダラエヌール診療所の

再開について

PMS支援室長

藤田千代子

八月十四日午前の連絡で、ナースの一人は数日前に休みで既にカブールの家族のもとへ戻っており、ドクター一人は二、三日後に休暇でカブールの自宅に戻る、など通常の連絡があった。同日午後、「タリバン兵がPMSの活動地の隣のクナール州を平和裡に制圧し、用水路建設現場の対岸のマルワリード取水門の近くに来ている」との

連絡が入った。その後予想に反してナンガラハル州が短時間でタリバンに明け渡され、事実上無政府状態となった。

翌十五日からPMSは事業を休止したが、十七日、ダラエヌール診療所の医師から「診療所は早く再開した方がよい。デルタ株が入ってきた六月から呼吸困難、咳、発熱の症状で受診する人が急増している。酸素ボンベも買い足した。また、定期的にマラリア、腸チフス、赤痢等も多い時でもある」と電話があった。さらに、「自分はジャラバード市内に住んでいるが、治安は安定しているの、診療所に通勤することには全く問題はない」と話す。この申し出にジア副院長は慎重で、カブールを制圧したタリバンが新州知事や郡長などを配置し、行政から正式に通達があるまでは様子を觀察す

るべきだとの意見で、患者を想い、はやる気持ちの医師に自宅待機を指示した。

その後も様子を見ていたが、州政府の保健局から定例会議への出欠の確認があり、地域住民からの診療活動の再開の期待も強く、二日に診療を開始した。

診療所にサマンガン州出身で少数民族の職員がいるが、あつという間のナンガラハル州の制圧だったため、自宅に帰りそびれて未だに診療所で働いている。「診療所には大勢の受診者が来ており、スタッフは皆元気で忙しく働いている。心配するな」と週に数回連絡をしてくる。

カブールに戻っている医師は診療所での勤務を希望したが、カブールとジャラバード間の安全確認をもうしばらく続けて判断することになっている。ダラエヌール診療所職員は、パシュトゥ、タジク、ハザラ、パシャイー族と多種の民族の集まりで、同じ目的のために長期にわたって共に働いているが、このような時期はそれぞれの事情に柔軟に対応していきたい。
(ハフィズラー医師及びジア医師との電話連絡をまとめました)

PMSの動き

- 6月 MRRD（農村復興開発省）からPMSへ涸れ川の工事及び植樹に関する協力の要請が頻回にあった。
- 6月下旬 PMS農場で5年目にして初のナツメヤシの結果。
- 6月19日～24日 NWARA（国家水資源管理機構）から技師5名がPMSに派遣され、PMS取水方式の研修を受けた。
- 7月16日 農業事業職員として5名を新規採用。
- 7月20～22日 大イード（犠牲祭）。
- 7月末 ヌーリスタン州で、局所的豪雨により大洪水が発生。
- 8月5日 マルワリード用水路C地区の護岸が7月末の洪水により洗掘され、補強工事を開始。
- 8月14日 タリバンが、ナンガラハル州と隣接するクナール州を掌握。PMS職員がバルカシコート作業地から、対岸ヌールガル（クナール州）に展開するタリバン兵を目視で確認。同日、ナンガラハル州も掌握。全職員の無事を確認。
- 8月15日 タリバン兵数人がPMS事務所を来訪。事務所の安全を確認。安全を最優先し医療・農業・灌漑事業全てを一時休止。農業・灌漑事業では水やりのみ続行。
- 8月21日 地域の安全を確認し、医療事業（ダラエヌール診療所）を再開。
- 9月2日 ガンベリ農場での作業を時間短縮で開始。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。
お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承ください、
お願い致します。

●事務局だより

*いつも温かいご支援をありがとうございます。
八月以降のアフガニスタン情勢を、固唾を呑んで注視しておられたことと存じます。現地のPMSスタッフとは常に連絡を取りあい、安全を確認しております。

「日本人スタッフは退避したのか？」という問い合わせがありましたが、ここ数年は日本人ワーカーの派遣はしておらず、アフガンの方々がすべての事業を担っております。「現地職員のご無事を祈っております」というお便りもたくさんいただきました。そのお気持ちには必ず先方に伝えるようにいたします。また、「中村医師の肖像画が消されたのは残念で悲しい」との声も届きましたが、中村医師は「そんなことより食糧危機!」とおっしゃることでしょう。他の肖像画も消されていますので、タリバンによる中村医師否定ではないと思われます。

*今号は過去の会報に掲載された中村医師のメッセージを再録しました。七三号(二〇二〇年十二月)以降の会報はホームページでお読みいただけます。なお、ホームページでは最新の情報をお届けすべく、頻繁な更新を目指しています。会報による報告のほうは後になることもありますが、ご了承ください。

*藤田千代子PMS支援室長が第四八回ナイチンゲール記章を受章しました。「中村哲医師が最も信頼し、最も多くの困難への対応を託された看護師として、一九九〇年より二〇〇九年までパキスタンやアフガニスタンで現地住民のために活躍した」(要約)功績によりです。受章式は来年行われます。

●PMS支援室より

*アフガニスタン情勢の変化を受け、「家族を避難させる必要のある職員には休暇を、そして避難にかかる経費を負担するように」とジア医師に告げた。打合せをしながら、お互いに全く同様の会話を以前した事を思い出した。

二〇〇一年九月十一日のアメリカ同時多発テロ事

件後の十月、いよいよアフガニスタンの首都カブールに空爆が始まるという時だった。

干ばつで食べられず、越境して隣国に逃れる術もない人々が集中していた首都カブールに、PMSは中村医師の即断で五カ所の診療所を開き、国内避難民の診療をしていた。そこで働いていた職員たちは、空爆を前にして「自分たちはもうどこにも行きようがない。カブールにいるこの大勢の人たちのために診療を続けたい」と中村医師に申し出た。家族を避難させる一週間を除いて、彼らは空爆が始まって懸念に診療を続けた。地元の人々は強いものだと思った時、全てを神に委ねるのだろうかと思った。それから二十年である。干ばつで干上がった畑を前に中村医師(PMS)は言った、「田畑の一面でも復旧させ、腹いっぱい喰わせたい」——その想いの二十年間であった。

今年は二〇〇〇年を上回る干ばつがアフガニスタンを襲っている。すでに昨年から数百万の子供たちが食糧不足に直面していると発表している機関もある。免疫力の低下によるコロナウイルスの感染も危ぶまれる。早く干ばつやコロナ感染対策に新政府が乗り出すよう祈るばかりである。

名古屋の(心)村から

*最初のベシヤワール会支部として、「ベシヤワール会名古屋」は一九九六年一月に中村哲医師を迎えて結成。故・村井静一さんと共にスタートしてから今年で二六年目になります。今はスタッフ一五名ほど、年四回の会報を中部エリア一〇県に発送する作業をしています。また、中村先生の講演会や写真展などを豊橋や岐阜をはじめ各地の皆さんと連携して行なってきました。先生は来られる度「名古屋の皆さんにはお世話になっています」と言葉をかけられ、そんな人柄に惚れ込んだり、恐縮したものでも。今、出来る恩返しは中村さんの志を胸に、長く活動を続ける事だと思っています。(五井泰弘代表)

会 則

- ① 本会の名称をベシヤワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州(現カイバルパクトウンクワ州)ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局を
〒八八〇〇〇〇三 福岡市中央区春吉
一―一六―八 VEGA天神南六〇一
☎〇九二―七三―一―二三七二
内におく。

総会、現地報告会は原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。